

Title	「民族文化論」の射程
Sub Title	Teaching "Ethnical representation"
Author	鈴木, 透(Suzuki, Toru)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2019
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. ドイツ語学・文学 (Hiyoshi-Studien zur Germanistik). No.58 (2019.) ,p.213- 222
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	羽田功教授退職記念号 = Sonderheft für Prof. Isao Hada 退職記念に寄せて = Zu Ehren Prof. Isao Hada
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032372-20190331-0213

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「民族文化論」の射程

鈴木 透

1 はじめに

以前に比べれば、オムニバス形式の講座は日吉キャンパスでも珍しくなくなった。しかし、複数の学部にもたがる語種や専門も異なる教員に加え、塾外の教員も参加し、毎年ほぼ固定されたメンバーで十年以上にわたって同一のテーマでオムニバスの授業を続けてきた例はあまりないだろう。幸いにして筆者は、そのような貴重な機会に恵まれた。羽田功先生がコーディネーターを務めてこられた「民族文化論」である。ユダヤがご専門の先生の下に、塾内からは種村和史（商学部、中国）、石井康史（経済学部、ラテンアメリカ）、工藤多香子（経済学部、キューバ）、塾外からは臼杵陽（日本女子大学、パレスチナ）、佐谷真木人（恵泉女学園大学、日本）の各氏が集まり、法学部からは唯一筆者がアメリカ研究者として参加した。

この授業の出発点は、羽田先生の呼びかけで上記のメンバーを中心に平成12年度（2001年）に始まった、民族イメージに関する学術フロンティアの共同研究だ。そこでは、民族イメージが様々なメディアを媒介しながら複合的に創出／上書きされる過程に着目し、それらの表象が実際にどのような機能を果たしてきたのか、各地域の事例を比較検討した。共同研究の成果は、『民族の表象——歴史・メディア・国家』として2006年に慶應義塾大学出版会から出版された。「民族文化論」は、この本に依拠し

つつ、各担当者が二～三回を受け持つ形式で、同年、半期科目としてスタートした。筆者の講義も、そこに収録された「時計、石鹼、星条旗——産業社会の出現とアメリカの身体形成過程」という論考を基にしている。

しかし教室では、単に本の内容をなぞるのではなく、むしろ、アメリカの事例が一見すると全く文脈が異なるように思える日本について考える上でどのようなヒントを含んでいるのかを学生に考えさせることに留意した。同時にそれは、アメリカを専門に扱う授業ではあまり深く立ち入れない領域の話題にも踏み込める絶好の機会ともなった。実際、毎回の授業で学生が提出する小レポートからも、この授業で毎年筆者が講義してきた内容は、自分がこれまで行ってきた授業の中でも最も学生の知的好奇心に訴えるものの一つであったと確信している。

羽田先生のご退任に当たり、この授業を通じて筆者が学生に発信したかったメッセージを改めて整理し、民族のような人間集団を表すカテゴリーとその形成過程について教えることの持つ射程について述べることにしたい。

2 アメリカ人の自画像

「民族文化論」を担当して驚いたのは、人種や民族なる概念が決して科学的根拠を持たない文化的構築物であるという学問の世界の常識が、学部1、2年生段階ではあまり浸透していないという事実だった。人間集団を表すカテゴリーがいかに人為的に創出されるのかを学生に理解してもらうには、アメリカの事例はかえって良かったかもしれない。

アメリカは、人為的な集団統合を宿命づけられて出発した実験国家である。それゆえ、「アメリカ人」なる概念の中身をどう規定するかをめぐるこの国は悪戦苦闘してきた。民族や国民といった人間集団を指すカテゴリーは、その集団には外部と識別可能な特徴が内在するという発想を暗黙の前提にしている。だが、巨大な移民国家として歩み始めたアメリカの場合、何らかの既存の共通項を媒介にして国民の境界線を囲い込む方法には

そもそも無理があった。実際、植民地時代から先住民問題を抱え、南北戦争の終結まで奴隷制度が存続し、いわば一国家二制度の様相を呈していたこの国においては、「アメリカに暮らす典型的な人とはどのような人間か」という問いに確たる答えを出せずにいた。だが、南北戦争後の急速な工業化に伴う、大量の移民労働者の流入は、「アメリカ人」の自画像の空洞部分を埋め合わせる必要性を告げていた。「アメリカ人」なる集団の特徴がばやけたままでは、新たな大量の移民を「アメリカ化」すること自体が無理であった。

筆者が授業で強調した第一の点は、人間集団が「自分たち」の範囲や特徴を規定しようとする重要な動機の一つは大量の外部の他者との出会いであり、しかもそれは歴史の偶然に左右されることをアメリカの事例は物語っている、ということだ。南北戦争に伴ってアメリカの工業生産が拡大し、工業の拠点であった北部が南部からの侵攻をほとんど受けることなく勝利した結果、十九世紀後半のアメリカは一気に産業社会へと転換する一方、ヨーロッパや東アジアの低開発国には余剰労働力が存在した。大量の非熟練移民労働者がそれまでほとんど縁もゆかりもなかったアメリカの産業社会の生産力の担い手になるという歴史の偶然こそ、アメリカ人の自画像を大急ぎで描き上げる必要性を提起したのだ。

だが、それまで確固たる自画像を持ちえなかった人々にとって、アメリカ人たるに必要な要件を掲げ、移民に要求することは、そう簡単なことではなかった。その結果、ある種のすり替えが行われた。アメリカ社会は、移民が満たすべき理想的な労働者の条件をいくつか掲げ、それを満たした人間こそアメリカ人だという形で、自画像を描き上げたのだ。実際にアメリカ人の側がすでにそのような理想的労働者の資質を獲得していたかは甚だ疑問だったにもかかわらず、理想的な労働者の姿によってアメリカ人の自画像を埋めるという作戦に打って出たのである。しかも、その条件をクリアできたかどうかを判断できる客観的な基準がそこには持ちこまれた。それを可能にしたのが、時計や石鹼、星条旗といった、産業社会への転換

によって安価に大量生産され始めた「モノ」であった。

アメリカ社会が移民労働者に要求した条件の一つ目は、効率的な生産を実現するための時間感覚だった。場所によって時刻がまちまちだった時代から標準時によって人為的に時間を人間がコントロールする形へと、十九世紀のアメリカは時間概念の大きなパラダイムシフトを経験したが、そうした時代の趨勢は時間を管理する道具としての時計の量産を促した。移民労働者は、時計を装着し、いわば時計内蔵人間の如く無駄のない動きで生産の最大化に貢献することが求められたのである。

移民に対するアメリカ社会のもう一つの要求は、清潔人間になることだった。南北戦争では、戦闘による死者よりも病死する兵士の方が多かったが、それは兵士たちが不衛生な環境に置かれていたことが深く関係していた。十九世紀半ばの段階では、細菌感染がまだ理解されておらず、不衛生が死を招くと考えられていた。その結果、不衛生との戦いは、産業社会の都市へと引き継がれる。長い船旅の末に都市のスラム街を形成するに至った移民下層階級は、都市の公衆衛生運動の新たなターゲットとなる。実際には当時のアメリカ人には入浴の習慣すら普及していなかったにもかかわらず、移民を清潔にするという急務が、アメリカ人たるもの清潔であるべし、という論理にすり替えられたのだ。そして、このキャンペーンを可能にした「モノ」こそ、安価に大量生産され始めた石鹸だった。

だが、時計や石鹸といった安価な製品を自らの身体と直結することで誰もがアメリカ人になってしまうという構図に違和感を覚えた人々も当然いた。アメリカに対する忠誠心をもっと植えつけなければ、移民たちは成功への秘訣を教えてくれたアメリカ社会を裏切るのではないかという不安である。とりわけそれを強く感じていたのは、南北戦争の退役軍人世代だった。産業社会の拝金主義の前に、命がけで国家に尽くした自分たちの功績が忘れられようとしているという危機感と移民の大量流入が重なった結果、移民に忠誠心を求める愛国運動が登場してくる。そのシンボルとなったものこそ、星条旗であった。現在まで続く、公立学校での国旗掲揚と忠誠の

誓いの慣習が始まったのも、こうした文脈からだった。星条旗に忠誠を尽くすという儀式は、移民のアメリカ化を確実にするために導入されたのだ。

かくして、時計、石鹼、星条旗のいわば三点セットが、移民労働者とその子孫が「アメリカ人」になるための道筋を定式化することになった。時間に敏感な能率的な労働者として生産の最大化に貢献し、絶えず清潔を心掛けることで不衛生を撃退し、国家に対して忠誠を誓う人間——。それまで不鮮明だった「アメリカ人」なるものの中身は、移民がどのような存在になってもらいたいかというアメリカ社会の欲望によって規定されたわけである。

筆者が授業で強調した第二の点は、空白だったアメリカ人の自画像を埋めるために動員されたのが、特定の集団に内在すると考えられる要素ではなく、むしろ、およそ民族性と普通考えられるものではない、集団の外側に存在する、しかも安価に大量生産された「モノ」であったという点だ。アメリカの事例は、ある集団の自己イメージの構築に、その集団の「外部」が関わっている可能性を提起していると同時に、産業社会への転換のような歴史的变化に伴う何らかの社会的要請が、その集団の実態や集団固有の特徴とは無関係に自己イメージを創造／捏造する可能性に気づかせてくれる。

このように、アメリカの事例は、人間集団のイメージの作られ方が歴史の偶然や他者との出会いに左右され、かなり便宜的に都合よく、しかも本来自分たちの持つ特徴とは無関係に構築されている可能性を把握する上では、学生にも比較的わかりやすかったと思う。だが、人間集団に付随するイメージが意外といい加減かもしれないという点は理解できたとしても、それが外国の事例では、自分たちにはあまり関係ないのではないかという感覚も残ってしまう。そこで筆者がこの授業で留意したのは、アメリカの事例から得られる知見を日本や日本人の自己イメージという文脈にフィードバックすることだった。つまり、社会的な大きな変化や歴史の偶然が引き起こす人の移動といった、民族性なるもののおよそ外部にあると思われ

るものが、逆に日本人の自己イメージの形成を促した可能性はないのだろうか、という問いを学生たちにぶつけてみることにしたのだ。

3 日本人の自画像の転換

日本人は単一民族だと信じている学生たちにとっては、日本人の自己イメージが、何らかの歴史的大きな変化や他者との出会いといった、偶然や外部の産物かもしれない可能性など、およそ考えてみたこともなかった話のようだった。確かに、島国という地理的条件や鎖国を経験した歴史は、日本人なる集団の同質性を素朴に信じ込む原因になりやすいだろう。そこで筆者は、アメリカの事例との類似点を日本という文脈の中で探す作業に入るにあたり、考古学や遺伝子工学、人類学等の新たな科学的発見によって、日本人の起源がどう読み解かれようとしているのかを簡単に紹介した。

日本人の先祖集団に関する近年の科学的研究、とりわけ発掘調査や古代人の DNA の解析から明らかになっている重要な点は、二点ある。一つは、氷河期以前に日本列島に人類が存在したという明確な証拠はないということ、もう一つは、日本人の先祖集団を形成することになるアジア大陸からの人類の移動には複数の流れがあったということだ。マンモスのような大型哺乳類を追いかけていたシベリアの狩猟民は、氷河期末期に北から北海道経由で本州に到達した。一方、氷河期の終焉による海水面の上昇でスンダランドが水没し始めると、東南アジアで大量の海洋漂流民が生まれ、その一部は海流に乗ってフィリピン、沖縄を経由して南九州に到達した。縄文人と呼ばれる人々自体が、北方の狩猟民と南方の海洋漂流民という出自の異なる集団から形成されていたのだ。

にもかかわらず、縄文文化という形で、独特の文化圏が日本列島で形成されたのは、これらの人々が日本の環境に合わせてライフスタイルを変えたからであった。大型の獲物を捕りつくした狩猟民は、日本の豊かな森林資源に着目した。そして、それまで貯蔵が主な用途だった土器を煮炊きする道具へと転用することで、ドングリの渋みを抜くことに成功し、木の实

を新たな食糧源にした。海洋漂流民も、カヌーの製造のために用いていた磨製石器を開墾へと技術移転し、雑穀などの小規模な農業で生活を安定させた。つまり、古代の日本では、異なる出自や生業形態を持つ移民が日本の自然環境に合わせてそれぞれライフスタイルを変えたことで、幅広い技術を駆使して日本列島の自然の恵みを役立てる文化が育っていったのだ。

その点、弥生時代の到来は、こうした縄文文化を大きく揺るがすものだった。春秋戦国時代の中国は、数百年にわたって戦乱が絶えず、大量の難民を生み出した。その一部は東方の海へと漕ぎ出し、朝鮮半島を経て、ついには西日本に到達した。渡来人たちは、戦乱を日常的に経験していた点でも、水稻農耕の技術を持っていた点でも、平和的に自然環境に合わせて暮らしていた縄文人とはかなり異質な集団だった。

実際、弥生時代の初期は、壮絶な戦乱期であった。食糧生産と武器に優れた渡来人の集落は、西日本の縄文人を次々に駆逐し、瞬く間に近畿地方まで進出したことがわかっている。だが、弥生時代が後半に向かうにつれ、渡来人の進撃は水稻農耕の困難な山岳地帯を背にした濃尾平野で止まり、両者の間には新たな段階が訪れる。西日本の土で作られた東日本の縄文土器の模様を持つ土器が西日本の渡来系集落から出土している事実や、神奈川県の中里遺跡のような、縄文系の道具と渡来系の水田の痕跡が併存し、武器の類がほとんど出土しない遺跡の存在は、ある時点から両者は殺戮をやめ、互いの技術を持ち寄ることで交流と共存へと転換したと考えられるのだ。このことは、古代人の頭蓋骨の変化にも痕跡を止めており、縄文系と渡来系の混血が始まったこともわかっている。

このように、近年の考古学や遺伝子工学、人類学の成果は、古代日本ではシベリア、東南アジア、中国、朝鮮半島など、アジア各地からのマルチエスニックな集団が流入し、結果的にいわば多文化共生社会へと向かいつつあった可能性を提起する。とすれば、現代日本人はいわば混血人の子孫であり、純粋な単一民族だと信じ込むことは、誤った自画像に縛られることになるのではあるまいか？ この際、むしろ、現代の日本人が素朴に自

画像だと信じているものが、実は多文化共生社会の産物かもしれないと考えてみる発想の転換が有効だろう。

ここで、アメリカの事例から読み取れる知見を応用してみると、どうなるか。歴史的な大きな変化と大量の他者との遭遇は、十九世紀の産業社会への転換期のアメリカにも、弥生時代の日本にも起きたことだ。新たな状況に対処するための新たな自画像は、両者に求められていた。とすれば、縄文系と渡来系の混血によって現代に通ずる日本人という集団の基盤が形成されていった過程は、日本人の自画像の重要な部分が作られていくプロセスと重なっていたのではないか。

例えば、日本人の自己イメージの一つに、和を重んじる集団というのがある。多くの人は、日本人は同質性が高いから協調性を発揮しやすいと考えるがちだ。だが、もしやこれは因果関係が逆ではないのか。壮絶な戦いを交えた異質な集団同士が、互いに相手が自分たちにはない技術を持っていると認識できたからこそ、古代の人々は紛争を終息させるために融和を重んじるという知恵にたどり着いたのではあるまいか。それは、一方が他方を絶滅に追い込むような事態が古代日本では回避され、文化も生業も異なる人々の混血がほどなくして始まったという歴史とも符合する。

アメリカの事例を介して日本人の自己イメージを改めて検討してみると、日本人の自画像も、自分たちに本来内在する特徴を言い当てたというよりは、歴史の大きな変化と他者との遭遇の中で、新たに必要とされた理想の人間像を定式化したものだった可能性が見えてくる。ある集団のイメージは、現実にもその集団にそうした資質が備わっていることを根拠に作られる保証はない。イメージは現実を忠実に反映しているわけでは必ずしもなく、時として現実とは無関係に捏造され、社会的に利用されうることをアメリカの事例は教えてくれる。日本人の自己イメージもそうした文脈と決して無関係ではないかもしれないと気づくことは、日本人が純粋性や同質性の神話から自らを解き放つための契機となり得るだろう。

氷河期の終焉から中国の戦乱に至るまでの、日本列島の外部が原因で起

こった人の移動という歴史の偶然は、この地で結果的に和という知恵に結実し、その恩恵を自分たちはいまだに享受し続けているのかもしれない。だが、素朴な単一民族神話の流布とともに、いつしか和は同質性に依拠した自分たちの本質であるかのように錯覚され、共存のための英知を編み出した古代人の偉業はかえって見えにくくなってしまったのではあるまいか。こうしてアメリカという一見無関係な事例を経由する何とも遠回りに思える旅は、意外にも日本人の自画像に潜む問題点の再認識へとたどり着く。

単一民族神話からの解放は、決して日本人のアイデンティティを危機にさらすものではなく、むしろ自らに秘められた多文化共生社会の DNA を再発見し、日本人の血に受け継がれたポテンシャルを再認識できる可能性を切り開いてくれる。その見地から筆者は、授業の最後に学生諸君にいくつかの問いかけをした。自分たちは純粋な単一民族だと素朴に信じ続けるのと、自分たちはマルチエスニックな多文化共生社会を目指した人々の子孫なのだという自画像を新たに持つのと、どちらがこれからの世界を生きていく上で建設的だろうか、と。そして、私たちが祖先を誇れるとしたら、それは他者と交わることなく同質性をひたすら守り続けてきたからではなく、得体のしれない他者に接近する勇気を持ち、幾多の困難と犠牲を経て共存する道を選んだからではないのか、と。さらには、現代の日本人を未だに包み込んでいる単一民族神話は、こうした祖先を持つ私たちの体に刻まれた DNA にむしろ逆行するのではないか、言い換えれば、もし、あなたが古代人の立場だったら、単一民族神話を素朴に信じ続ける人々の姿を見てどう思うだろうか、と。

4 おわりに

大学での勉強の過程で最も知的興奮を覚える瞬間の一つは、一見無関係そうな事柄が意外な形でつながった時であろう。十九世紀の産業社会への転換期のアメリカと古代日本、人文系のテーマと理系の研究成果という、時空も学問領域も異なる話題を縦横無尽に結びつけていく作業は、自分自

身にとっても楽しかった。そうした知の冒険の醍醐味の一端を学生諸君には伝えられたのではないかと考えている。

と同時に、この授業では、知の冒険を自分たちの正体を見つめ直すという問題意識に接続できた点が意義深いと感じている。少子高齢化による労働力不足に伴う移民労働者の受け入れの問題をはじめとして、多様な背景の人々とどのように暮らしていくかという課題は、今後より大きな意味を持つに違いない。そのような事態とどう向き合うべきか、学生諸君には重要な示唆を与えることができたのではないかと思う。多様な集団の流入や他者との遭遇なくして今の日本はなかった、自分のDNAは海の彼方の誰かと共通部分を持つかもしれない、といった想像力を巡らせることができるようになるだけでも、今後自分たちはどのような選択をすべきかを考える時の後押しになるだろう。

振り返ってみると、「民族文化論」という科目は、大学での学びや自分たちの正体、今後の日本の針路などについて、学生諸君の問題意識を一気に啓発する上で豊かな射程を持っていたと思う。その一端を担うことができたのは、実に光栄であった。末筆ながら、共同研究からオムニバス講義に至るまで、筆者をあたたく迎えてくださった羽田先生に厚く御礼申し上げるとともに、この授業を共に担当していた最中に故人となられた、石井康史さんのご冥福をお祈りする次第である。